

幕末創世記(下)

邦光史郎

河出書房新社



幕末創世記(下)

©1974

昭和四十九年九月二十日 初版印刷

昭和四十九年九月三十日 初版発行

著者 邦光史郎

発行者 中島隆之

発行所 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三一六

電話東京(03)二九二一三七一一

振替 東京一〇八〇二

乱丁・落丁本はおとりかえいたします
定価はカバー・帯に表示してあります

印刷・中央精版印刷 製本・中央精版印刷

目次

凶刃	5
勤皇問屋	34
異人斬り	63
菊と葵	93
呉越同舟	122
七卿落ち	150
長い夏の惑い	181
蛤門の変	214
旗手たち	270

焚
楨

御
正

仲

幕末創世記
(下)

凶 刃

一

伏見京橋のあたりは、多い時は百艘以上も大小の舟が集まり、その上旅客や貨物がつねに混雑する淀の川舟の発着場となっていたから、早朝から夜に至るまで、いつも賑やかで活気にみちあふれていたわ。

だが、もう夜も更けて、川風になびく川端柳と、水面に映る灯影ばかりの町となった。そして酔客に吠えつく犬の啼き声ばかりが厭に耳に立つてならない。そんな夜の底から湧き出てきたような一団の侍が、今、舟宿寺田屋と記された軒灯のかたわらに黒影を浮かべていた。

二階の手すりに誰かが入れ忘れたらしい手拭いがまだひらひらと風にひるがえっていたけれど、今、寺田屋の店先に詰めかけた鎮撫使たちの先発組四名の顔色は、ただならぬ気配を浮かべていて、うっかり口を挟もうものなら、たちまち白刃を見舞われかねない。

そんな時、おらんぞと叫ぶ橋口伝蔵の声が、階上からひび

いてきた。

「よか。おいどんが行ってき申す……」

江夏仲左衛門と森岡清右衛門の二人が、草鞋を脱いで、二階へ上がっていった。もうすこし時刻が早かったなら、恐らく船待ちの客で混み合っていたことだろうが、今はもう閑散としている。そのため、階上で談笑する人声が、一きわ高く聞こえてきた。

二人の使者たちは、幅広い寺田屋の階段をそっと上がっていった。よく拭き込まれてつるつるしているが、階段はそう高くはなかった。広い踊り場の左右に客間が四つばかりあって、志士たちは、二間ぶつ通しにした表の間を使っている。

有馬新七を首領とする精忠組左派の面々が二十余人。それに客将ともいうべき真木和泉守の一派が十人と、田中河内介の一组が四、五名、併せて四十人近い蹶起組の志士たちはすでに夕食をとり終えて、目下籠手をつけたり新しい鉢巻きをしめたり、中には鉄砲や火縄の具合いをしらべたりと正に一触即発、それはそうだろう、彼らはこれから、九条閑白と酒井所司代を斬りに行こうというのだった。

「おい、今から出かけていって、夜明けまでに所司代屋敷へ着けるじゃろうな」

「勿論じゃ、長州の同志たちに、遅れを取っては、顔向け出来んでのう」

そんな私語を交しつつ彼らは、今しも有馬の点呼に応じて

声を挙げた。

そつと障子ぎわに忍んできた江夏と森岡の二人は、互いに目配せして、開いた障子のつい近くに座っている柴山愛次郎を差し招いた。

「なんじゃ、おはんたちは……」

「ウム、すまんが、おはんと有馬どん、それから橋口壮介どん、田中どんに急用じゃ。ちょっと下の部屋まできてくいい」

穏やかな申入れであつたため、有馬たちは、何事かと思つて階段を下りていった。すると、階下の小部屋に奈良原と道島が待ち構えていた。

「久光公のお召しじゃ。即刻藩邸へ参られい」

その一語で、有馬は硬化した。

「いまさら無駄じゃ。それよりわれらは青蓮院の宮様のお召しによつて、これより参上いたすところ、されば御用がすみ次第参り申そう」

「なんじゃと、貴公は、久光公のお供をして参つた薩藩の侍ではござらんのか」

「いや、勤皇の御用が先でござす」

それを聞いて、気短な道島が激昂した。

「これ有馬どん、君命に背くとは何事か。君命に背かば、腹を切りやい」

すると有馬は、いささかの動揺もない氷のごとく冷え切つ

た態度で言い放つた。

「いいや、それも宮様の御用がすんで後のこと……」

「おのれ、どうしても、聞かれんか。おいたちや上意討ちの君命を帯びちよつとじゃが、そいでも聞かれんか」

「しかたなか……」

有馬は大剣をつかんで立ち上がろうとした。道島は、こめかみに青筋を走らせつつ、ひくひくと臉を痙攣させている。

今でこそ、左派と右派に分かれているものの、元はどちらも同じ精忠組の同志として、辛酸を俱にしてきた者ばかりである。そこで奈良原が、今はこれまでと最後の駄目押しを行なつた。

「有馬どん、どうしても君命に従わんと申されるのか」

だが、有馬は黙したままだった。そこで、そのかたわらに肩肘張つて控えていた田中謙助が、叫ぶように答えた。

「何ちやうてん聞かん！」

もう何がなんでもやつてやるぞと、駄々っ子のように眼を怒らせている。

すると、これも感情家の道島が、もはや限度いっぱいふくれ上がったものが、袋を破つてほとばしり出ることくに、「上意ッ！」と叫んで、大剣を抜き放つた。それも、薩摩示現流の骨をも断つ初太刀である。白刃が一閃したかと思うと、ぱつと鮮血が噴き飛んだ。ざくり、眉間を断ち割られた田中謙助の眼球が飛び出して畳の上に転がった。

ちやうど運悪く、この場へ大山格之助に率いられた別働隊が到着した。彼らはすでに斬り合いがはじまったことを直感するなり、大剣の鯉口をぶっと切って土足のまま殺到した。

そしてその先頭に立っていた山口金之進は、つい目の前に背を向けている柴山愛次郎めがけて、示現流の立ち木撃ちをそのままに、袈裟掛けに斬りつけた。しかも、右、左と二太刀つづけて浴びせかけたため、柴山の胸部は着物の襟許そっくりに斬り裂かれ、そのため重い頭部が振り出されたようにごろりと前へ傾き落ちていった。

むろんもうあたり一面へ血潮が飛び散って、刀持つ手も踏みしめる足許もぬらぬらする。

その中で有馬は、たった今田中を斬った道島と相對していた。だが道島の示現流に対して有馬は神陰流の剣を学んでいる。薩摩の人は、示現流を氣違い稽古と呼び神陰流を踊り稽古と評しているが、正しくこれは剛と柔の對戰であつた。

ところで、この激しい血戦を二階に集合していた同志たちがなぜ氣づかなかつたかというところ、この時たまたま寺田屋の表道路を揺るがせて、重い荷物を積んだ牛車が通つていったためである。彼らはその轟音に耳を奪われていて、階下の惨劇に氣づくことがすこし遅れた。

しかも、寺田屋の主人夫婦と女中たちは、あまりにも凄惨なこの場の情景に氣も顛倒して腰を抜かしてしまつたため、ただ驚き喚くばかりで誰一人として知らせに立つ者がいなか

つた。

この時、たまたま便所へ入っていた森山新五左衛門は、手を洗おうとして、刃を交えている有馬と道島の姿に氣づいた。まだ数えて十九歳の新五左衛門、さっと血の氣が引いてぶるぶるとふるえが襲つてきた。けれど、どうせ剣を執つて斬り死にするために義挙の一員となつた身の上である。彼は、大剣を二階に置いてきたことを悔んだ。しかし倅い脇差を帯びている。一尺三寸の小刀を引き抜くなり、彼は乱闘の場へ駆けつけていった。

だが、血走つた目がたちまち彼を射すくめたかと思うと、もう風を巻いて剛劍が襲つてきた。ぐわん！ 殴られたように新五左衛門は転倒した。だが、それでも体勢を立て直してすぐ向かつて行こうとした。しかし、一步進んではまた斬られ、立ち上がつては三度斬られて、たちまち血達磨のごとくになつてしまつた。

二

「おい、奉行所の手が廻つたぞ」

階段口に近い誰かがそう叫んだ。

「火をつけちやるわい」

「なに、火をじゃと……」

階上の三十人余が一斉に剣をつかんで立ち上がった。

階段の下あたりで、カーン！ と烈しい物音が起つたか

と思うと、パツと火花が飛び散った。それが薄暗い夜の廊下に、青白く光って消えた。

その頃、頑丈そのものといつてよい薩摩造りの剛剣を受けとめようとした有馬の新刀が、ボキンと二つに折れてしまった。びいーんと両手が痺れてしまったけれど、素手のまま有馬は、道島の胸倉に食いついていった。

道島もこれには驚いたが、何しろ不意を突かれてそのまま壁に押しつけられてしまった。

「おのれ……」

もがいて、なんとか有馬の腕をすり抜けようとする。だが有馬は必死で押えつけている。すると、そこへ橋口壮介の弟の吉之丞が抜刀のまま駆け寄ってきた。まだ二十歳の若者ゆえ、すでに逆上して両眼が吊り上がってしまっている。

「吉之丞！」

有馬は、首をねじ曲げるようにして振り返った。きらっと吉之丞の燃える炎にも似た両眼が光ったようである。

「おいごと刺せ！」

一瞬、何を言われたのか分からぬと、吉之丞はぼんやり首を振っている。それを見て壁に押えつけられた道島が、利き腕を殺された白刃を虚しく振り廻そうとした。

その時、はじめて吉之丞は敵の存在に気づいた。だがその敵は、幅広い有馬の背中の中へ向こう側にすっぽり隠れ込んでいた。

「おいごと刺せ！」

自分の身体ごと相手を刺せというのである。わずかに目顔でうなずいた吉之丞は、持ち直した刃をエイッとばかり有馬の背中めがけて送り込んだ。

むろんそうすれば有馬は死ぬ。だがそれだけの単純な論理すら、その時の吉之丞の脳裏には浮かなくてこなかったようである。いやすでに動揺して夢遊病者のごとくに行動していた吉之丞は、ただ命じられるがままに実行したのみであつたろう。勿論、結果を考えていてやることではない。すべては咄嗟の出来事、いわば物のはずみのようなものだった。

無防備な背中にぐさりと突き刺さった白刃は、ずぶずぶとどこまでも深く進んでいって、道島の胸板を刺し貫いた。いくら覚悟の上とはいえ、有馬は味方の白刃に胸部を刺し貫かれ、しかも道島をしっかりと押えていなくてはならないのである。それはもう気力以外の何物でもない。有馬の食いしばった口許がやがて開いて、ごぼごぼと血が噴きこぼれてきた。

柄まで通れと突き立てた吉之丞の刃は、有馬の背から道島の背まで串刺しにして、兩人を荒壁にそのまま縫いつけてしまった。

その頃、二階から駆け下りてきた弟子丸龍助は、階段下に待ち受けていた奈良原の剛剣に腰を切られて転落、つづいて下りてきた吉之丞の兄橋口伝蔵は、大山格之助の一刀に脚を払われた。

「なんの、おいに敵うか」

片足となった橋口は、つい目の前に立っていた鈴木勇右衛門めがけて一刀を浴びせかけた。

びゅッ、鈴木の前足が削り落とされて吹き飛んだ。

「おのれ、親の仇！」

喚いて、躍りかかった鈴木の一子昌之助は、橋口めがけて減多打ちに白刃を揮った。つづいて下りようとする西田直五郎は、鈴木に従僕上床源助の繰り出した手槍に突かれて、転げ落ちてきた。

すでに息絶えた者、斬り裂かれてまだ死に切れずうめき苦しんでいる者、あたりは腥い血の池地獄と化している。

だが階上の志士たちは、なおも血路を開かんとして、こんどは柴山龍五郎が白刃片手に下りてこようとした。

「待て、龍五郎！ 一時待っちゃくれ！ 上意じゃ！ 事情はよう分つとる。久光公も同意じゃ！」

奈良原喜八郎が、大声を發した。

「龍五郎、もし聞かずばわが藩のみか、天下の事はそれ切りじゃぞ！」

しかし、階上の人々は、みな石に化つたごとくに押し黙っている。恐ろしい空白の時間であった。

今はこれまでと、奈良原は、血糊で刀の柄にこびりついてしまった指先を一つずつ引き剥がすようにして、一刀をかなぐり捨てた。そして双肌押し上げ上半身裸体となって、ガッ

キと合掌した。

「さあ！ 止まってくれ！ 思い止まって、おいの話を聞いて行け！」

頼む、頼むと合掌しつつ、一段ずつ奈良原は階段を上がって行く。

むろん、斬ろうと思えばいつでも斬って捨てられる。だが侍の中の侍をもつて任じる薩摩武士が、無刀で合掌している裸男を斬れたものではない。まして相手は同郷人、それも互いに血判を交したことがある同志である。

けれど奈良原は死を決していた。すでに何人もの同志を斃し、その死屍がつい足許に累々と転がっている。だがこれ以上血を血で洗う同志討ちをしたくはない。だからこそ、おのれ一身を投げ出してでも、なんとか食い止めようというので、白刃の林ともいうべき階上へ突き進んでいった。

——さあ、いつ斬られてもわしは何も言わん。しかし、斬るのはわしだけにしておいてくれ。

死を覚悟した人間ほど強いものはない。彼は白刃の真っ只中へ捨て身で飛び込んでいった。

「聞いちよくれ。新七どんたちは、君命を聞こうとせなんだがゆえ、やむなくあんなことになってしもうたが、おはんたちには敵意はなか。それより、悪いようにはせんゆえ、お館さまの許へ行っちゃくれ。これ以上争うても益はなか……」

たしかに理窟はそうかもしれない。けれどすでに精忠組左

派の党首ともいふべき有馬新七が殺されているのだから、血気の志士たちが奈良原たちを斬ろうとするのももっともなところかもしれない。だが、相手を殺せば自分も斬られ、争いは連鎖（連鎖）反応して、きりがなくなることになる。奈良原は、剣の林に裸身を投げ出すことによって闘争の歯車を食い止めようとした。

この時、真木和泉守が進み出て、精忠組左派たちの憤激を押しなだめた。

「只今のお話、もっとも至極……。まして久光公が義挙に同意とあらばなおさら、ただ挙藩実行のため諸君を押し鎮めようと言われるのであらう。さればただちに君前へまかり出て、諸君の所信を申し述べられよ。そうすれば必ずより大きな力となり申そう」

狂気の中であって、ひとり冷静であった真木和泉守の説得が、ようやく志士たちの暴走を食い止め得た。

この夜、即死した者は有馬、田中、柴山愛次郎、弟子丸龍助、西田、橋口壮介、同伝蔵の七名、そして鎮撫使側の死者は道島一人、その他重傷を負った者が、義挙側に山本四郎と森山新五左衛門の二名、上使側に森岡、山口と各二名ずつ出ている。

ところが、こうして京都藩邸へ出頭した志士たちは、久光公の面前へ出るなどもつての他、ただちに拘禁の上、やがて本国へ護送され、重傷の森山は身分賤しき者のため切腹を命

じられ、これを伝え聞いた山本四郎は、同志たちの無念を憤って自ら憤死してしまった。

なおこの時逮捕された田中河内介父子と千葉郁太郎たち浪士五名は薩摩送りとなったが、日向細島に着く直前、いづれも護送の役人に斬り殺されて、死体はそのまま海中に投ぜられて空しくなった。

三

精兵一千を率^{ひき}いて入京した島津久光は、西洞院^{にしどういん}錦小路^{にしんこうじ}にある薩藩京都屋敷を宿所としていた。ところが、せいぜい百名程度の収容力しかない京都藩邸へ千人の兵がやってきたのではどうにもならない。

そこで附近の民家を買^かい上げて、兵たちの宿舎とした。それもそう都合よく空家があった訳ではないから、当時の相場で銭五十貫ぐらゐのボロ長屋を倍近い九十貫で買^かい上げ、しかも家主には薩藩お出入りを許した上二人扶持を給したので、たちまち薩摩の評判はほんとにね上がった。

それに引替え、島津入京と聞いてあわてふためき、それ大砲じゃ鉄砲じゃと大騒ぎを演じた幕府側の京都所司代酒井忠義は、なんたる醜態ぞやと、上は宮廷より下は丁稚小僧に至るまでの軽蔑を買^かって、その評判の悪いことまことに対照的であった。

「もはや所司代なんぞ無用の長物、それより薩州さまさえご

ざらっしやったら、わしらは枕を高うして眠れる」

洛中洛外を問わず、薩摩の評判は上がる一方である。

こうした風潮を反響して、朝廷の方でもだんだん島津を重用され、京には武力がないゆえ、これまで幕府に軽んじられてさんざん口惜しい思いをさせられてきたのだから、これからはいつまでも京に留まりおるようにと、今では島津久光なくしては夜も明けぬ有様であった。

それも実をいうと、寺田屋事変が久光に伴いしたからである。

大体、手を汚すことの大嫌いな公卿たちは、刀を抜いたり血をみたりすることが何よりも嫌いである。ところが、血気さかな浪士たちがぞくぞく京へやってきて、九条閼白を斬ろうとした。そして、京都所司代はふるえ上がってなす術もなく傍観しておったにも拘わらず、島津久光は、直ちに家臣をやって鎮圧してしまった。つまり、激しやすい精忠組左派と右派の暴走によって起こった私闘を、朝廷は暴徒の鎮圧と見て取って、さすが島津であるといふに頼もしがっている。

そこで、島津久光に対してお褒めの勅諭が下って、左文字の短刀を褒美として賜った。人生、何が伴いをもたらすか分からないもので、自分の不手際によって起こった同輩相撃つ寺田屋の惨劇を、かえっておのれの手柄とすることのできた久光はすっかり面目をほどこした。

「この分なら、万事うまく行きそうじゃのう」

近頃の久光は、自信満々ことに機嫌がよろしかった。

「御意、この上は、なお強硬に、久世閼老の上京を幕閣へ申し入れ、同時に、栗田の宮様をはじめとする廷臣と、一橋慶喜様方の謹慎を解き、安政戊午の大獄の張本人ともいふべき酒井所司代の解任を推進いたさば、天下の信望は、ことごとくわが藩に集まること、疑いございません」

大久保一藏は、今こそ薩藩が天下に雄名をとどろかせて国政改革の先鋒となるべき時がやってきたと確信している。それは小松帶刀、中山尚之助、堀次郎などという久光側近の者たちみな同様であって、彼らはまるで天下を取りでもしたように有頂天となっていた。

ところが、その蔭に、寺田屋事変で殉難した志士たちの悲愴な死があり、久光の怒りにふれて国許へ送り返されてしまった精忠組左派の面々の犠牲がひそんでいたのである。彼らは君命の一語に反抗できない家臣であったため、血涙を呑んで薩摩へ追い返され、しかも罪に伏さねばならなかった。

四月十日、大坂を出帆して鹿児島へと向かう天神丸に押しこめられて、本国へ送還されていった西郷吉之助、村田新八、森山新蔵の三人も同じ犠牲者といつてよく、彼らは、船が鹿児島へ着いても一切上陸を許されず、そのまま山川港へ送られてしまった。

西郷帰国と知った有川十右衛門たちは、西郷の弟吉次郎たちと共に急ぎ山川港へ急行したけれど、藩吏に遮られて、面

会が叶わない。

「一体、吉之助に、どんな罪がごわすのじゃ」

問いつめると、その罪は四箇条あって、まず浪人たちと共に事をはかったこと、次に年少客気の者共を煽動したこと、さらに藩主の御滞京を図ったこと、そして下関より勝手に京・大坂へ飛び出していったこと、以上四つの罪によって、西郷は徳之島へ渡海と相定まったという。だが、どれ一つをとってもすべて、西郷にとっては、身に覚えのないいいがかりでしかなかった。そのため彼の罪は、遠島の刑に処すというのではなく、渡海を命じることになっていた。けれど名目は渡海となっているが、実質は島流し以外の何物でもありはしない。

西郷は、甲板に、どっかと坐り込んで、碧海に釣り糸を垂れている。南国薩摩の五月は、すでに夏といってよく、ぎらつく太陽が目眩しくてならなかった。

——もうおいどんは、二度と久光公のおんに罷出んぞ。

だから、後は好きなようにやってくれ。わしは島の子供たちを集めて、また読書を教えることにいたそう。

西郷は、すでにすべてをあきらめ切っている。そんな時、祖母の死が報じられたけれど、やはり帰宅は許されなかった。

ところが、こうして西郷は徳之島へ、村田新八は鬼界ヶ島へ送られて行った後、ただ、ひとり取り残された森山新蔵

は、身分賤しき者のため山川港に留め置かれて、流罪先さえきまらない有様であった。

——なんたることだ。久光公は、わしに死ねと申されるのか。

悲憤していた矢先に、長子森山新五左衛門が、伏見寺田屋において重傷を負い、翌日死を命じられたという知らせが届いた。

そこで森山は、もはやわが事終われりと覚悟を定めた。

生き伸びて何にかはせん深草（伏見）の

露と消えにし人を思ふに

これまで精忠組のため尊皇攘夷のため、私財を抛つてただひたすら縁の下の力持ち役を勤めてきたその酬いがこの有様である。森山は、船中で自害を遂げて息子の後を追った。

ところでこの森山新蔵に養われて、侍の端くれになることの出来た田中新兵衛はその頃どうしていたかというところ、元が船頭上りの俄か武士であるため久光公出兵の選に洩れ、同様に落選した森山新五左衛門の後を追って、新兵衛もまた京へ向かった。

だが、新兵衛には金がない。あるはただ烈々たる闘志と大剣のみ。けれど、それではとても京へ旅する役には立たない。そこで、衣類や持ち物の一切を売り払って金に替え、そ

れでもまだ路銀が足りないため、船頭の腕を生かして、土佐へ向かう鯉船に乗り込むことにした。

そして、土佐からやっとの思いで大坂へたどり着いたけれど、すでに久光公は入洛した後だと分かったので、そのまま道を急いで京へ向かった。

四

文久二年の京都は、まことに不景気であった。それというのも、幕府が勅命に背いて外国と交易をはじめたため、生糸が値上がりして、京都の西陣や桐生などの機業地は、原料が手に入らず、従って開店休業の有様だったからである。何しろ京呉服の本場で、江戸・大坂をはじめ全国へ向けて、西陣の織物や京染め呉服を送り出していた衣裳の本場京都が、全く振るわなくなってしまったのだから、その打撃は大きかった。そこで京の人たちは、みな幕府を恨んでいる。そのため、どこへいっても尊皇攘夷派が大いにもてはやされた。

ちょうどそんな時、島津兵が入京してきたものだから、京都市民は、

「薩州さまのお出ましで、諸式（物価）も今に下がりまっしやる」

と、まるで世直しの神がやってきたような歓迎ぶりだった。

そこで薩摩藩邸のある西洞院錦小路の一带は、昼間から物

売りが集まってきた、大いに賑わっている。寺田屋事変があって、数日後のことであった。

この京都屋敷の表門へ、髪はぼうぼう顔面やつれて黒光りしたような異相の若者がやってきた。背丈は五尺そこそこだが、いかにも筋肉質のよく引き緊まった体軀をしている。

「おたずね申す。こちらに森山どんがきておられるはず、田中が来申したとお伝え下さらぬか……」

いかにも朴訥（ぼくたく）そうな口調で、門番にそう申し込んだ。

しかし、にわかになぐれ上がった藩兵たちを抱え込んで、気の立っている門番はニべもなく首を振った。

「そげん人（おれ）はおいでなはらん」

「そんなことはなか。たしかに来ちやるはずじゃ」

「いいや、おらん者はおらん……」

それっきり相手になろうとせぬ。

——おのれ、人を馬鹿にしおって。

新兵衛はムカッときた。しかし、脱藩者が大手を振って藩邸へ入れたものではない。まして彼は、足軽よりまだ身分の低い島津内蔵の抱え人という資格で、やっとな刀を帯している身の上であるから、とても藩士並みに振舞うことはできなかった。

——困ったぞ、こりや……。

といって囊中（のちゆう）すでに無一物、ここで森山に会えぬとなると、それこそ乞食でもしなければならぬ。はて、どうしよ

うかと、途方にくれていると、折よく精忠組の同志仁礼源之丞が、邸内よりやってきた。仁礼はれっきとした藩士、それも近頃羽振りのよい精忠組の一員であるため、足取りまで颯爽^{さつさつ}としている。

「仁礼さア……」

思わず駆け寄って行くと、なんだというように仁礼は振り返った。

「田中新兵衛でござす」

「おお、おはんも京へおじゃったか……」

どことなく人を見下した様子が気になってならないが、現在の新兵衛は、とてもそんなことにこだわっている余裕がなかった。

「拙者、森山さアを頼って京へまいりました。新五左衛門どんは、どげいにござすか」

「なんじゃ、おはん、あのことをまだ知らんのか」

「あのことは、何事^{なにこと}でござすか……」

「そうか。そりや仕様がなか、よし、それならちょっとその辺までつき合わぬか」

誘われて、近くの飲み屋の客となった。

薩摩風の大たぶさに結い上げ、綿服に棕櫚^{しょうし}緒の薩摩下駄をはき、その上剛剣を腰に帯しているゆえ、どこへいっても一目で薩摩っぽと分かって、それが今では人気を呼んでいた。

「ヘエ、お待ち遠さん……」

小女が酒肴を運んできた。

「まず一献^{いっけん}参ると致そう」

熱燗^{あかかん}が五臓六腑にしみわたって、新兵衛はしばし瞑目した。

「どげんした……」

「いえ、空きっ腹にこたえもした……」

「そうか。そんなら遠慮のう飲み食いしちよくれ」

「いえ、それより、新五どんが、どげんなされたのか、まず承^{うけたまわ}りたい」

「うん、新五どんは、実をいうと腹を召された」

「なに!? 腹を……」

あまりの意外さに、新兵衛は、しばし絶句した。

「左様、ついこの二十三日、伏見の寺田屋において、有馬どんたち義拳組と、久光公の君命を帯びた奈良原どんたちとの間に切合いが起こりました」

「同志討ちでござすか」

「左様、まことに残念なことながら、仲間同士血を流し合うたばかりか、九人も死んでしもうた。新五どんもその中の一入よ……」

「そげん馬鹿なことが……」

信じられぬと、新兵衛は首を振った。

「ところが、その上、森山新蔵どんは、西郷どんといっしょにお国へ戻されてしもうて、もう上方にはおりもはん……」